

# パレスチナ社会における歓待のジレンマ

## ——オスマン末期を舞台としたテキストを手がかりに

田浪 亜央江（広島市立大学）

キーワード: パレスチナ、歓待／ディヤーフア、移動、難民、シオニズム

### はじめに

現在までに日本語に翻訳されているパレスチナの文学作品のなかで最もよく知られている作品の一つ、ガッサーン・カナファーニーの「太陽の男たち」のなかに、こんなセリフがある。「ハーティムは遊牧民だったってことわざがあるが…俺にいわせりゃ、そんなのはただの作り事さ…アブー・サアドさんよ。そんな時代はとっくの昔に終わっちゃった…」<sup>(1)</sup>。

ここに登場する「ハーティム」とは、ハーティム・アッ＝ターイーという前イスラーム期の詩人だ。「ハーティムよりも寛大'akram min ḥatim」という褒め言葉として使われる諺などで知られ、イブン・アブド・ラッビヒによる大著「無二の首飾り」においては、前イスラーム期のもっとも寛大な3人物の一人としてその逸話が語られている<sup>(2)</sup>。アラブ社会、とくにベドウィン社会が客人を寛大に手厚くもてなす伝統をもつことはさまざまな場所で語り継がれてきたが、1962年に書かれた本作の登場人物によって、「そんな時代はとっくに過ぎてしまった」と一蹴されている。仕事を求め、国境を密入国しようとした従兄弟が案内人に騙されたという

エピソードを口にするこのパレスチナ人のドライバーは、皮肉にもこの後、同胞である3人の密入国者に対し、いわば過酷な「歓待」をなす立場にたち、結果的に彼らを死に追いやってしまうことになる。

パレスチナ人であるゆえの惨い経験を経て、人生に「十分以上に疲れ切ってしまった」このドライバーが3人のパレスチナ人密入国者の手伝いを決めたのは、「ちょっと余分な金」欲しさのためであって、同胞への哀れみや義侠心によるものではなかった。3人の死体を処理するため墓穴を掘る気力など持ち合わせていなかった彼が、気休めであれ誰かの手によってそれが埋葬される可能性を残そうとして選んだのは、ふたたび皮肉なことに、ただ砂漠の中の塵埃処理場の前に死体を放置することだった。

アラビア語で歓待／もてなしhospitalityを意味する「ディヤーフア ḍiyāfa」は、「どんな人であってもともかくはもてなすべきであるという、古来のアラビア遊牧民のあいだの人づきあいのルール」<sup>(3)</sup>といった表現で日本の一般書でも紹介され、比較的広く知られている。ムスリムはこの規範を前イスラーム期の遊牧民社会と結びつけ、現代の生活のなかでも意識的に息づかせ実践しているが、自らの手で賓客をもてなしたアブラハム（イブラーヒーム）の姿に歓待の原型を見る伝統は、ユダヤ教・キリスト教・イスラームに共通する<sup>(4)</sup>。西欧はプラト

(1) Kanafānī, Ghassān. *Rijāl fī al-shams*. Mu'assasat Ghassān Kanafānī al-thaqāfiya. 1963. p.70. 以下も参照。ガッサーン・カナファーニー（黒田寿朗・奴田原睦明訳）『ハイファに戻って／太陽の男たち』河出書房新社、1978年。

(2) Ibn 'Abd Rabbihī, 'Aḥmad ibn Muḥammad. *Al-'iqd al-farīd. Al-juz' al-'awwal*. Dār al-Kutub al-'Ilmiya. pp.241-244.

(3) 片倉もとこ『「移動文化」考』日本経済新聞社、1995年。68頁の記述を一部改めて一文にまとめた。

(4) 『創世記』第18章1-8節。『クルアーン』第51章（＝「撒き散らすもの」章）、24-26節。

ン・アリストテレス以来の歓待の思想の系譜をもつが、近年の「難民の時代」を背景として、とりわけルネ・シェールやジャック・デリダらによるカントの〈普遍的歓待〉概念の再検討は注目された。「世界市民法は普遍的な歓待をもたらす諸条件に制限されなくてはならない」としてカントが歓待を普遍的義務とする一方、そこから滞在権を排除し訪問権に限定したことに対し、両者はともに不満を示す。訪問の意味を歪曲したヨーロッパ人の不正行為がその射程に含まれることを指摘しつつ、歓待を法として成立させるためのカントの努力をシェールは最大限に読み込むのだが、国民国家という前提を疑うことがなかった点でカントも幻想のなかにいたとする。他方デリダは、歓待を法とすること自体の不可能性を私的空間の拡大する現代世界のなかでさらにつきつめるとともに、無条件の歓待が条件付きの歓待によってつねに侵食されるアポリアを示す<sup>(5)</sup>。

こうした議論をふまえると、歓待とはディヤーフア *diyāfa* について一般に理解されているように、身の危険と無関係の状況で与え手の寛大さや親切心を示すことではなく、自身の危険と引き換えにそれを与えるという不可能な状況にこそその本質がある。そうしてなされた歓待が、はからずしも与える側ではなく与えられる側の身の危険を引き起こすこともあろう。金のためではあれ、上述のドライバーがあまりにも無謀な行為を選択したのは、彼自身が理不尽な暴力と恥辱を受けてきたパレスチナ人であったことを抜きには考えられない。ここで問題にしたいのは、「親切が仇になる」などという日本語の常套句では全く掴みきれない、国民国家の保護の対象の埒外におかれ日々リスクの重さを天秤に掛けながら〈パレスチナ人的状況〉を生

きる者が与え／受け取る〈歓待のジレンマ〉である。

本稿筆者はこれまで、オスマン末期・イギリス委任統治期のパレスチナ人の記述を手がかりに、パレスチナ人による旅や移動の意味の変遷を考えてきた<sup>(6)</sup>。本稿で取り上げるのも、オスマン末期が舞台となり、委任統治期に書かれたテキストである。ここで扱うナジブ・ナッサーもハリール・サカーキーニーも、テキスト執筆当時は「パレスチナ人」というアイデンティティを持っていたわけではない。しかしすでに近代的な思考世界とナショナリズムの世界的広がりの中に生きており、パレスチナの生み出した代表的知識人・文化人として数えられている。ここでの目的は、すでにシオニズム運動が活発化し、彼らの気づかぬうちに将来のパレスチナの方向性が作られていた時期に、異なる文化や作法をもつ人々や、潜在的な〈敵〉との接触の場において、〈歓待のジレンマ〉がいかに生まれ、それがどのように対処され／なかったのかを検討することである。国境線が引かれ、その枠組みからはじき出されたことで〈パレスチナ人的状況〉を生きることを強いられる人々が増加し、そのイメージがますます拡散する世界にあって、諸国家体制形成の確立以前にあった〈他者〉との関わりの作法を想起することは、それへのオルタナティブを構想するさい、つねに必要とされる作業であろう。

## 1. ナジブ・ナッサー 逃避行で得た歓待

著名なパレスチナ人弁護士であるラジャー・シェハーダは2010年、自分の“great-great uncle” ナジブ・ナッサー [1865-1948] の足跡を辿り、その歩みを被占領社会で生きてき

(5) ルネ・シェール (安川慶治訳)『歓待のユートピア 歓待神礼賛』現代企画室、1996年。ジャック・デリダ (広瀬浩司訳)『歓待について バリのゼミナールの記録』産業図書、1999年 (=筑摩書房、2018年)。また、以下も参照。ジャック・デリダ (港道隆訳)「万国の世界市民たち、もう一努力だ!」『世界』1996年11月、298-313頁。

(6) 田浪亜央江「オスマン末期のパレスチナ人にとっての郷土／祖国——ハリール・サカーキーニーの日記を入り口に」『アジア太平洋レビュー』14号、2017年。「イギリス委任統治下パレスチナ人の旅行記に見る〈郷土〉」『アジア太平洋レビュー』13号、2016年。

た自分の半生と重ねてみせるルポルタージュを刊行した<sup>(7)</sup>。ナッサールはパレスチナでもっとも古いアラビア語紙の一つ「アル＝カルメル」の発行人・主筆であったことで知られてきたが、さらに最近ではシオニズムに対する批判と警告を誰よりも早く公論のなかで発した人物として再評価されている<sup>(8)</sup>。シェハーダが紹介するのはこうした比較的広く知られるナッサール像ではなく、自身の経験に基づいて書いたとされる小説『ムフリフ・アル＝ガッサーニー』から見えるナッサールである。シェハーダはこの作品を「お粗末な書かれ方」だと酷評しながらも、この小説の記述を手がかりに、自身の大叔父の足跡を辿りながら、当時の状況に近づこうとしている。

シェハーダの酷評ももっともだと思われるほど、この小説は読みにくく、欠陥がある。しかしここで注目すべきは、オスマン末期という時代に有力者、都市の一般人、僻地のベドウィンと多様な人々に置われながら、当局の目を逃れて移動したナッサールの実体験が、小説のかたちでそのまま記録されている点である。それだけに、トレッキングを趣味としながら人権派の弁護士として活躍するシェハーダが、オスマン当局から逃避行を続ける大叔父ナッサールの足跡や当時の心境を自身の現在と重ねて読んだ心情は理解できる。本稿では、シェハーダの著作も参考にしつつ、あくまで歓待とそのジレンマというテーマに引き付けて『ムフリフ・アル＝ガッサーニー』を読むことになる。

### ナジブ・ナッサールと「ムフリフ」の背景

『ムフリフ・アル＝ガッサーニー』はもともと、ナジブ・ナッサールが自身の新聞「アル＝カルメル」紙上に1930年から31年にかけて連載したものである。ムフリフ・アル＝ガッサーニーとはナッサール自身が実際に用いていた筆名

でもあり、「アル＝カルメル」のいくつかの記事はこの名で署名されている。本作によれば、ムフリフ（＝ナッサール）は第一次大戦中の1915年3月からナザレで半潜伏生活を送り、翌年6月5日のファイサルによる「アラブの反乱」開始直後から本格的な逃避行に入った。その後自ら決断して出頭するが、ダマスカスでの短期間の拘置所生活を経て無罪となり、しばらくダマスカスに滞在した後、許可を得てハイファに戻った。

作家のハンナー・アブー・ハンナーは本書の解説で、作中の登場人物は主人公の名前以外すべて本名で登場しており、さらに作中で交わされている会話の多くは実際になされたものが使われていると述べている<sup>(9)</sup> [Ḥannā 1881, 25-26]。実際には、現実の出来事や会話が作品にどの程度反映されているのかを確認することは困難である場合が多い。しかしこの作品には、ストーリー展開上は不要で回りくどいディテールがひじょうに多く書き込まれており、その理由の一部は筆者の技量上の制約に由来するとしても、事実をそのまま記録しているためでもあると考えれば、確かに納得できる。

本作の問題はさらに、小説としてはあまりにも説明調であること、人物描写がぎこちなく不自然で、アラビア語の文法の間違いや文体上の不自然さも散見されることである。最大の問題は、「自分の支持する大義に身を投じた」ことについてはシャハーダも認めるムフリフの姿勢が、一個の人間のものとして相対化されていない点である。当時の読者はムフリフが書き手ナジブ自身であることに気づいていたはずであり、とくに生身の彼を直接知っていた読者なら、ムフリフが英雄的であればあるほど、違和感を持ち興奮めしたのではないだろうか。とはいえ文学作品としての出来不出来でこの作品を評価してもあまり意味はない。

(7) Shehadeh, Raja. *A Rift in Time: Travels with My Ottoman Uncle*. Profile Books. 2010. 同書によれば、ラジャー・シェハーダ [1951-] の母方の祖母ジュリアの父方の叔父がナジブ・ナッサール、という関係である。

(8) 彼が 1911 年に「アル＝カルメル」紙上で集中的に掲載した「シオニズム」は、同年に書籍として刊行されたが、近年カイロの出版社から復刊された。Naṣṣār, Najīb. *Al-Ṣahyūniya*. Mu'assasat Handāwī li al-Ta 'ālim wa al-Thaqāfa. 2012.

(9) Ḥannā, Abū Ḥannā. Muqaddama. in *Riwāyat Muḥliḥ al-Ghassānī*. Dār al-Ṣawt. 1981. pp.24-25.

作品の冒頭で、ムフリフの兄ハリーム<sup>(10)</sup>は1915年2月初旬、夜間に突然訪問した司祭からムフリフが当局の嫌疑を受けていることを知らされ、ハイファから姿を消すよう忠告せよと告げられる [MG, 34]<sup>(11)</sup>。兄からそのことを聞かされたムフリフは、知人からスパイの嫌疑を捏造されかけた出来事や、自分がかつて、オスマン帝国の同盟国であるドイツの領事らに対し、オスマン政府の戦時政策に反対する見解を無警戒に述べたことがあるのを思い出す。事態が深刻なのを悟ったムフリフは、家族に仕事でアッカに行くと言い残し、実際にはナザレへと向かう [MG, 40]。

自宅から姿を消したものの、国外に出れば自分が本物のスパイであるとみなされると考えたムフリフは、ナザレの友人たちの保護下で身を隠しながらも、何かあれば家族の様子が分かる場所を選ぶ。旧知の人間が伝を頼りにムフリフの居場所を探り、彼を訪問することもあれば、ムフリフ自身が信頼できる有力者に面会に出向くこともある。とはいえオスマン当局に属する人間とムフリフの関係のありようは、特に現代の読者を困惑させる。まずナザレに着いた翌日ムフリフは、アラブ人とはいえオスマン軍の在ナザレ部隊指揮官のサビーフ・ベイを訪問し、大戦の行方やシオニズムの問題について語り合うのである [MG, 40]。このように、本作にはオスマン政府当局者や、オスマン当局と深い関係を持つアラブ人有力者が登場する。ムフリフは当局の手から逃れているとはいえ、オスマン当局からのメッセージを受け取れる立場にあり、いわば泳がされている立場ということになる。

## 歓待の受け手であること

ヨルダン渓谷に近づいたムフリフは、道中いくつかのベドウィンのテントで身体を休ませつつ、次の場所に向かう。一人の男が馬に乗って同行し、ムフリフを送り届けた後に彼を乗せていた馬を連れて戻ることになっている。最終的にヨルダン川の浅瀬を馬に乗って渡り、川の東側に着く [MG, 119]。現在のようにヨルダン川の西と東で境界線が引かれているわけではない。そのことはアレンビー橋（またはシェイフ・フセイン橋）<sup>(12)</sup> を通ってイスラエル・ヨルダン間の国境通過手続きをしなければこの川を渡ることの出来ない現在の読者の注意を喚起させる。

ムフリフはアリー・シャマーリーのテントに着くと事情を打ち明け、数日滞在させてもらいたいが、自分を保護するのを恐れるのであれば別の場所に移る、との意思表示をする。相手は、かつてシオニズムの脅威について警告し、土地買収に抵抗するこの地の人々を支援したムフリフのことを覚えており、彼への恩義を口にする。ムフリフは「アラブ [ここではベドウィンの意] の忠誠心がかたちをなしていること」をそこに確認し、涙を流す [MG, 120]。なお、一般にベドウィンはすべてムスリムとしてイメージされているが、この作品に登場するベドウィンはキリスト教徒であり、ムフリフ（＝ナッサール）自身もクリスチャンである。イスラームの文脈とは一線を画した、ベドウィン社会の伝統の実践としての歓待が描かれている点も、この作品の興味深い点だ。

この集落でことごとく障害になったのは、まずその家が迎える客の多さである。アリーのテントにも大勢の来客があり、そのなかには警察

(10) 親族内の関係を知るラジャー・シェハーダはこの兄を、ハイファで薬局を経営していたラシードだとしている（本文中には薬局経営者との記載は特にない）。このように身内の名を変えたり、頻出する人物を「某」とか単に「友人」と記して名を伏せながら、事実関係は出来るだけそのまま描いていると思われる。

(11) Naşşār, Najīb. *Riwayāt Muflih al-Ghassānī*. Dār al-Şawt. 1981[=1931]. 以下、小説『ムフリフ・アル＝ガッサーニー』の引用に関しては、本文中に [MG, 頁数] として表記。

(12) アレンビー橋は1918年に英国軍によって作られ、ヨルダン川西岸地区とヨルダン間の検問所を通過するさいに使われる橋。シェイフ・フセイン橋は1994年11月、イスラエル・ヨルダン和平条約に基づいて設置されたヨルダン川国境検問所を通過するさいに使われる。



関係者もいるため、油断がならない。一族はいくつものテントに分かれて暮らしており、ムフリフは毎日違うテントで寝ることにするが、結局はそこを出て別の部族のもとへと赴くことになる。タイベ<sup>(13)</sup>にいる旧知のハザーアとその叔父ハサン・アブドゥル・ワーリーに保護を請うが、ここでは彼らの身内がムフリフの存在を誇らしげに明かしてしまい、大勢の客がムフリフ目当てにやってくるという事態になって困惑する。そこで、さらに人里離れた山中で暮らすルシュド・サルディーの庵に身を寄せることに決める。ルシュドはハサンと羊を共同所有する関係であり、かつてムフリフがハサンとともに裁判の支援をした相手でもあった。ここが、ムフリフの逃避行のなかで最後に身を寄せた場所となる。

深夜にひっそりとルシュドのもとに着いたムフリフは、翌朝、檜の木に囲まれた庵で目覚め、周辺を歩き回る [MG, 138-139]。ムフリフが起き上がって庵の周辺を歩き回っているのに気がついたルシュドは、驚きあわてる。もてなす側は客よりも早く起き、客が目覚めたのと同時に手と顔を洗う水を客のもとに持ってゆくのがベドウィン社会のやり方であり、客は寝具の上に座ったままコーヒーを飲むのである。ルシュドはムフリフのもとに駆けつけ、どうぞお座り下さい、コーヒーと朝食のパンをお持ちしますから、と声をかける。ムフリフは一瞬の沈黙の後、自分は客ではないから、礼を尽くしてくれることは無用だ、私はお前の羊の世話をしたいのだ、と言う。

そんなことはとんでもないと言い張るルシュドに対し、羊飼いをすることこそが自分の身を守るのだと説得し、放牧のやり方をルシュドに教えてもらう。やがてムフリフは一人で毎日放牧に出かけ、ルシュドのほうは「まるで長老のように」馬に乗ってタイベに出かけるようになる。ムフリフは心安らかに過ごし、「世界がこのように、都会から隔たった純朴で幸福な姿に戻ることを望む境地へと至る [MG, 146]。

つまり歓待を行う側が伝統として固守するマナーを壊すことで、ようやく彼は自身の平安と快適さを楽しむことができたのである。

だが、別の場面では、ムフリフは相手の生活観念を無理に変えることを放棄する。都会生活の長かったムフリフにとって、ここでの彼の悩みは、自分を匿ってくれた友人たちに現在起きていることへの不安を除けば、大量のシラミの存在だった。彼はルシュドに、衣類をロープの上に広げ、陽にかざし空気を通すことを女たちに指示するよう提案する。

「どうしてですか?」「シラミを追い出すためだよ」。「シラミは服から出て来るんじゃないかもしれません」「ではどこからだというのだ?」「シラミは皮膚から出てくるんでさあ」。ムフリフはこの答えに笑い、「ルシュドのこの素朴な信念を変えるのは無理だと分かり」、それ以上は何も言わない [MG, 147]。これも実経験に基づくエピソードだと思われるが、部外者であるムフリフは、異なる生活スタイルをもつ相手の生活に干渉することなくやり過ごすことを選ぶのである。しかしここで笑って済ませることが出来るのは、ひっそりと自己防衛を行っているからであろう。すでにそれまでに、三日に一度は放牧に出るさいにルシュドの家の石鹸をこっそり持って出かけ、羊が川辺で水を飲み休む合間に服を脱いで自分の身体と服を洗うという工夫をしているのである [MG, 142]。歓待を受けることはこのように、相手の文化や生活習慣のなかに入り込むことであり、しばしば歓待の受け手の適応能力、あるいは〈密かな工夫〉が求められる。こうしたことをごく自然に行えたこともナッサールの資質であり、それが彼の活動を支えていたことだろう。

### 「恩義を感じる」ことの帰結

そんなある日、ルシュドのもとにムフリフを案内してきたハザーアとハサンが、二人の客を連れてくる。うち一人は間違いなくムフリフの甥であるという。甥はムフリフの兄の家や親戚

(13) タイベの地名をもつ村や町は数多いが、ここでのタイベはヨルダン側東岸（現在のヨルダン王国領内）に位置する。

の家、ムフリフがこれまで立ち寄ったあらゆる場所に捜査が入っていること、ムフリフに対し50リラの報奨金が設けられたことを話す。かつてムフリフを匿った3名とムフリフの兄は、ムフリフの居場所に関する情報を提供しなければ逮捕されダマスカスの軍事裁判所に送られることが避けられない。また、オスマン当局者から、出頭すべきだとの間接的なメッセージも伝えられた [MG, 151]。

かつてムフリフの支援を受け、現在は彼の忠実な支援者を自負するハザーアとハサンはムフリフの出頭に強く反対し、今ムフリフが出頭すれば、間違いなく絞首刑にされるだろうと断言する。ムフリフは二人の考えを聞いた上で、自分を匿っている二人の立場への配慮を示す。出頭しない選択肢の正当性を述べた上で彼は言う。「…だが、困っているときに私を快く受け入れてくれた友人たちが私のために連行され、酷い目に遭うならば、私は一生苦しむ。私のために立派な男たちが元気を失い、よい仕事や人の援助を出来なくなるのは嫌だ。だから私は結果がどうあれ、出頭するのをためらわない」 [MG, 154]。

つまり当局の嫌疑の目を逃れ保護を求め、友人の手厚い歓待を受けたこと、その事実に対して恩義を感じていることそのものが、ムフリフの出頭の理由となる。手厚い歓待の受け手がそれに恩義を感じればこそ、歓待の与え手がそのために被害を蒙ることがあってはならない。与えられた歓待の記憶こそがこうした結論を導いている。受けた歓待にどこまで恩義を強く感じそれに拘束されるかは、あくまで受け手の問題である。相手に良かれと判断して歓待を与えたことが、そうであればこそ受け手の後の行動を強く規定する。歓待をすること、受けることの普遍的なジレンマが、ここに場所や時代背景を越えて浮上している。

## 2. ハリール・サカーキーニー 〈ウンマ・アラビーヤ〉の歓待

イギリス委任統治期のパレスチナで教育者として活躍したハリール・サカーキーニー [1878-1953] が今日のパレスチナに名を残すのは、詳細な日記の存在に負うところが大きい。この日記を基礎資料とした研究はすでに多く存在し、本稿で取り上げる1917年末の「レヴィン事件」も、多くの研究者の関心の対象になってきた。ここでは歓待とそのジレンマという関心に添って、この事件前後のサカーキーニーの日記を読んでゆく。

サカーキーニーの生年はナッサールより13年後になるが、二人は同時代の人間である。両者は直接顔を合わせたことはないものの、上述のようにナッサールがダマスカスの刑務所で過ごし、釈放された直後に、サカーキーニーは次に述べるような経緯で同刑務所に入る。彼は同収容者から、自分がナッサールと会ったこと、ナッサールのようにサカーキーニーも早期に釈放されるだろうと励まされたことを日記に書いている [1917/12/1, 215] <sup>(14)</sup>。

サカーキーニーが後述するようにユダヤ教徒のレヴィンを匿い、自身のダマスカス刑務所送りの理由となるような行為に出たことについては、その出来事についてのサカーキーニーの記述を読むだけでなく、そこに至る彼の状況や思想を理解する必要がある。ここではまずエルサレム帰郷後のサカーキーニーの状況について簡単に触れ、以下、サカーキーニーのシオニズム観とアラブ社会との関係について述べる。

「レヴィン事件」に先立つ1907年から翌年までのニューヨーク時代の日記 <sup>(15)</sup> が、ひたすらエルサレムへの郷愁と恋人スルターナへの思いに満ちていたのに比べ、エルサレム帰郷後の彼の日記は、まるで別人の手によるもののようなエネルギーに彩られる。早朝に起きてシャ

(14) al-Sakākīnī, Khalīl. *Yawmiyāt Khalīl al-Sakākīnī: Yawmiyāt. Rasā' il. Ta' ammulāt. Kitāb al-Thānī: al-Nafḍah al-'Urthūdhuksīyah. al-Ḥarb al-'Azmā. Al-Nafī ilā Dimashqā*, 1914-1918. 2004. 本文中で引用するサカーキーニーの日記のほとんどが第2巻からのため、その場合は [日付、頁数] として本文に表記する。

(15) ニューヨーク時代のサカーキーニーについては、[田浪、2017]

ワーを浴びると（途中からこの日課に運動が加わる）、即座に出掛けるか、誰かの訪問を受けるといった社会的な活動が始まる。サカーキーニーの当面の生業はアラビア語の個人教授だったが、教え子として市長のファウディー・アラミーの息子や、のちにパレスチナ社会の指導者の一人となるムーサー・アラミー [1897-1984] が登場してくる。また、帰国直後から、憲政復帰後の解放的なムードのなか、発行準備の始まった「アル=クドゥス」紙や「アル=アスマイ」紙の編集に関わる。この時期の日記には、革命直後のエルサレムの新聞人たちの、先走った情熱の片鱗が伺える。さらにこの時期、自身が属するエルサレムのギリシャ正教コミュニティの改革運動にも積極的に関わる<sup>(16)</sup>。

そして1909年、サカーキーニーはエルサレム旧市街のなかに「ドゥストゥーリーヤ（憲政）学院」を設立する。1908年12月15日から1914年1月1日までの5年あまりの期間の日記は喪失しているため、学院発足前後の詳細は不明だが<sup>(17)</sup>、異なる宗派の子弟が同じ教育課程で学ぶという「我が国bilādnāの歴史上初めて」のシステムをとり、賞罰も表彰も成績評価も行わないという、当時としては画期的な教育方針を掲げていた<sup>(18)</sup>。念願の学院設立は、決してサカーキーニーの経済的安定を意味するものではなく、彼はあちこちでアラビア語の個人教授を続けていた。このなかで彼が出会うのが、アラビア語を学ぶシオニストのユダヤ人であった。

### サカーキーニーとシオニズム

1914年初頭に正教コミュニティ改革運動から手を引くことを宣言したサカーキーニーは、この時期に教え始めたユダヤ人移民の生徒との

関係の中で、シオニズムに目を向ける<sup>(19)</sup>。この時期すでにアラブ人の土地買収は問題化されており、前章で取り上げたナジブ・ナッサーの『シオニズム』は1911年に刊行されていた。サカーキーニー自身がシオニズムに関して日記で最初に記述しているのは、1914年2月16日のことである。「イブリー氏」と個人教授の約束をし、彼のいるファーストホテルに行ったものの、彼は「ユダヤ人の大ロスチャイルドを出迎えにヤーファに行っており、会うことが出来なかった。ユダヤ共同体al-'Ummah al-Yahūdīyahの復興とその民族的感情の目覚め、そしてパレスチナで自立した生活を取り戻したいという願望に関わっているという話だ」。サカーキーニーは続けて、「興味に値するこの問題について学び、自分の見解を明らかにしよう」と述べる [1914.2.16, 55]。

翌日にはさっそく「もし私がシオニズムを嫌うとすれば、それが他者の没落の上に独立を達成しようとしているために他ならない」と書く。一方でこの日、エルサレムでロスチャイルドの出迎えを待つ群衆に遭遇し、「アラブ共同体al-'Ummah al-'Arabīyahにはロスチャイルドのような、復興のために自分のお金を使う人物が必要だ」と述べている。ナジブ・ナッサーが『シオニズム』のなかで、ヘルツルのように「公の利益のために捨て身になる忠実なリーダー」がこの国al-bilādには必要だ、と書いたのと同様の発想である [Naṣṣār 2013=1911, 56]。

当時サカーキーニーがアラビア語を教えていた生徒には、上述のイブリーのほかイルヤース・ファラージーがおり<sup>(20)</sup>、ともに熱心なシオニストであったが<sup>(21)</sup>、サカーキーニー自身

(16) この経緯については Der Matossian, Bedross. The Young Turk Revolution: Its Impact on Religious Politics of Jerusalem (1908-1912). 2009. In *Jerusalem Quarterly* 40 (winter 2009-10). pp.18-33.

(17) 次女のハーラ・サカーキーニーによる「サカーキー日記」第1巻への付記によれば、1948年4月にエルサレムからカイロへと避難するさいに失われたという。al-Sakākīnī, Khalīl. Yawmiyāt Khalīl al-Sakākīnī: Yawmiyāt. Rasā' il. Ta' ammulāt. Kitāb al-' Awwal: Nyūyūrūk. Sulṭānah. Al-Quds. 1907-1912. Markiz Khalīl al-Sakākīnī al-thaqāfī. 2003. p.346.

(18) ibid. p.347.

(19) 生徒とはいえ、サカーキーニーより年長者であったと考えられ、日記中で彼らは Mr. や sir に当たる、外国人男性に対する敬称 khawāja 付きで呼ばれている。

(20) 一時、イブリーには週に6日、ファラージーには週に4日教えていることが日記から分かる。[1914/3/17, 82]

は彼らの活動の内容をまったく知らなかったはずである。ファラージは弁護士で、トルコ語とフランス語しか話せず、サカーキーニーが片言のフランス語でコミュニケーションをとっている [1914/3/17, 81]。サカーキーニーは彼のような生徒と接するなかでフランス語の必要性を感じ、多忙の中での学習を決意している。「正午前後の空き時間、フランス語を学び、精読しよう。忙しさが増すにつれ、興味と喜びは増し、新鮮な気持ちになる」 [1914/3/23, 84]。しかしファラージは、あるとき約束の日時に現れないまま姿を消してしまうのである [1914/9/18, 99]。

一方イブリーはアラビア語がかなり出来、アラビア語でディスカッションをすることが出来たようだ。テキストを読む代わりに、トーラーや西洋と東洋の女性についてイブリーと話したという記述のほか、1914年3月4日には、彼とシオニズムについて意見を交わしたという記述がある。サカーキーニーがここでシオニズムを批判した論点は3つある。一つは、シオニストたちがパレスチナの地元の人々 *al-waṭanīyūna* をボイコットし、ユダヤ人同士でしか取引せず、ユダヤ人しか雇おうとしないこと。二つ目は、こうした経済面に限定せず、地元の文化や価値を軽んじ、学ぼうとしないこと。そして三点目として、ムスリムとキリスト教徒の関係を悪化させるため、一方に対して他方の悪宣伝を行っていることである [1914/3/4, 68]。イブリーの返答は、それは自分のことしか考えられない無教育のユダヤ人の問題であって、英国にいる一流大学出身者がパレスチナに来た暁には社会教育が広げられ、自分自身もそれに貢献する、という趣旨である。明らかに噛み合っていないやり取りではあるが、このように詳しく記録してい

ることから、サカーキーニーは議論をすること自体に一定の手ごたえを感じていたのだろう。しかしそのイブリーも3月28日以降、ぷつりとサカーキーニーの日記に登場しなくなり、シオニストとの直接の議論をする機会はいつのまにか失われている。

サカーキーニーは、シオニズムそのものの評価というよりも、ユダヤ共同体をアラブ共同体と比べ、前者は「言語と場所を失った」ことから、「ユダヤ人の運動は空想の運動である」とし、むしろアラブ共同体の潜在的な力を強調する。言語と場所を失うことのなかったアラブ共同体は、現状は無力感に支配され社会的な病が蔓延しているものの、ナショナルな感情 (*shu'ur waṭanīyah*) さえ目覚めさせれば、繁栄することは容易である [1914/2/20, 60]。ナショナルな感情の最大の要素は文芸であり、それを高め広げる手段として重要なのは、学校、諸組織、新聞、芝居、宗教施設であり、とくに学校が重要である [1914/2/25, 63]。彼はこうした認識の中で、アラビア語教師であり学校設立者である自身の社会的役割を強く再認識してゆくのである。

### 大戦期のサカーキーニー

サカーキーニーの日記は1914年の5月20日から9月1日まで中断しており<sup>(22)</sup>、サライエボ事件に始まるヨーロッパでの戦争勃発直後の感想を知ることは出来ない。しかし11月11日、オスマン帝国がロシアと英仏の宣戦に応じる形で宣戦し、ジハードの呼びかけを行ったことについて、彼は次のように帝国を批判する。まずムスリムだけでなくキリスト教徒とユダヤ教徒を徴兵し、キリスト教国であるドイツ・オーストリアとともに行う戦争を「ジハード」と呼びかけ

(21) ファラージはユダヤ入植協会の法律顧問だった。ロシア生まれのイブリーはヨーロッパ各地でヘルツルを含むシオニスト活動家と交流し、パレスチナでは土地買収のプロカーとして、のちにヘブライ大学が建てられるスコープス山の土地買収の仲介にも関わった。[Manna' 2005, 118-9]

(22) 日記がもし当局関係者に読まれることがあれば、絞首刑になることが必至だという周囲の忠告に従い、日記を従姉妹のハンナの家に預けることにしたという [1915/3/28-4/4, 158]。ここでは8日分の日記がまとめて書かれているため日付を確定できないが、3月30日にはエルサレム旧市外のジャッファ門でスパイ容疑者が公開処刑されており、こうした恐怖は現実的なものだったのだろう。



るのは矛盾である。そして宗教戦争というかたちを作り、中立国に戦争参加の口実を与えたことで、むしろムスリムを危険に晒した。ナショナリズムの観念が広がったこの時代にジハードは支持を集めないだろう。この国が多様な民族で構成されているにもかかわらず、ジハードを呼び掛けることは、トルコ民族防衛のためのものにすぎない [1914/11/18, 132-3]。

サカーキーニーは戦争への憎悪心にも言及しているが、絶対平和主義的に戦争に反対するわけではない。「この戦争が私に教えたのは、災難を軽視すること、人生を嘲笑うことだ。生きようが死のうが同じことだ」と述べ、敵の攻撃中であっても「私は自分の長年の持論である歓喜の哲学に従う」と書く。社会全体が戦争に巻き込まれる動きを見下し嘲笑し、日常の生活スタイルをあくまで固守することで、あたかも戦争などないかのように構えるという宣言のように読める [1914/11/3, 116]。

1915年1月4日、37歳になる直前のサカーキーニーは徴兵リストに自分の名が入り、エルサレムと北部または南部を移動する輸送部隊に配属されることになったのを知る [1915/1/4, 145]。2ヶ月前、24歳から35歳までの男子が徴兵の対象になるとの報を聞いたさいには、いずれ自分も対象者となることへの覚悟を示していたが [1914/11/3, 116]、それは実際に起きた。この日の日記には感情の動きは記載されておらず、市長のフセイン・アル＝フセイニーのもとへ免除のための助力を求めに出向き、教師の多くが兵役免除となるなか、学校の創設者であり現役の校長である自分は当然免除されるべきだと訴えたことが簡潔に記されている。この日から、日記が中断する同年3月31日までのおよそ3ヶ月間、それまでどおり戦局や当局の動き、自分の見解などを記録することに加え、徴兵免除の適用を受けるためサカーキーニーがあちこちの窓口に出向き、関係者に面会した記録が日記の頁を埋めることになった。

それまで正教会コミュニティは、コミュニティ内の学校教職員の免除申請を行ってきたが、正教会から独立しているドゥストリーヤ学院の教員であるサカーキーニーの立場

は微妙であった [1915/1/5, 146]。1月半ばには、宗教を問わず24歳から40歳の男子全員に、在所確認のため召集局への出頭が命令された [1915/1/16-9, 150]。このころ新たな兵役免除税額が発表されたが、サカーキーニーは免除税を払うのではなく、配属先をエルサレムとする軽微な仕事への変更申請をするという方針をとる [1915/1/20, 150]。開戦後、サカーキーニーはアラビア語の個人レッスンはまったく行わなくなったと見られ、明らかに経済的苦境にあった。

もはやサカーキーニーには、兵士たちの労苦はまったく他人事ではない。「今日彼らは薪や空箱、ガスタンク、麻袋をバラックからバラックへ運ばされ（中略）多くの者がこの任務に疲弊しきっており、武器を担いで戦場に行くほうがましだと雑言を吐く」 [1915/1/8, 146]。サカーキーニーの脳裏には、この隊列に自分がいる光景が浮かんでいたに違いない。

ほどなくして、エルサレムの病院で短時間の勤務を命じられたことで一旦は安心するが、命令は二転三転し、再度輸送部隊に召集される [1915/3/7-21, 155]。エルサレムへの配属を再度訴えたサカーキーニーの申し立ては認められず、輸送部隊を拒否した代わりに最終的に提示されたのは、パレスチナ北東部のベイサーンでの任務だった。他の者たちのようにエルサレムでの任務が与えられず、ベイサーン送りが示されたことに、彼は深い懷疑を抱く。「私の罪は何だ？ 思うに私は二つの罪を負っている。一つはキリスト教徒であること。キリスト教徒は英国、フランス、ロシアになびいていると考えられている。二つ目は私が学校長であり、そこで生徒の精神に民族主義の精神 (rûh waṭāniyah) を広めていることだ」 [1915/3/21-28, 157]。そして、自分にはこうとしか言いようがないとして次の言葉を続ける。「私はキリスト教徒でも仏教徒でもなく、ムスリムでもユダヤ教徒でもない。同様に私は、アラブ人でもイギリス人でもフランス人でもなく、ドイツ人でもロシア人でもトルコ人でもない、人間に属する者の一人なのだ」。

文脈から引き離してしまえば、抽象的な「人

間」を志向しただけのものとして読まれかねないこの言葉は、戦争遂行のためにイスラームの紐帯が強調され、エルサレム社会におけるムスリムとクリスチアンの共生が破壊されつつあった状況下で、自身が暴力的に「クリスチャン」という枠組みに分類され、それによって人生が国家の政策に翻弄されようとしている状況への、強い拒絶の意志表明である。

市長のフサイン・アル＝フサイニーから兵役免除税の半額22リラを支援され、3月31日に免除税を支払ったことで、サカーキーニーは、「井戸の中から救い出され」た[1915/3/284/4, 159]。サカーキーニーの支払った正確な額は記されていないが、前述のようにアル＝フサイニーは自分の召集の知らせを聞いてサカーキーニーが真っ先に支援を求めた人間であり、サカーキーニーは彼の助力について、のちの日記の中でも繰り返し感謝の気持ちを明らかにしている。だがこれは、サカーキーニーがアル＝フサイニーのようなごく少数の人間に対してのみ親愛感を抱いていたことの裏返しでもある。

「フセイン以外の人間とは話したいとは思わない。彼は兄がその弟に示すような援助をしてくれた唯一の人物なのだから」[1917/11/23, 177]。以下で述べる通り、サカーキーニーがユダヤ人アーサー・レヴィンを匿った行為の背景には、エルサレムの人々への深い失望やサカーキーニー自身の社会との距離感があったのではないかと考えられるのである。

## 歓待の決断

第一次大戦末期の1917年11月27日火曜日の夜、

ハリール・サカーキーニーはエルサレムの自宅に、知人のユダヤ人オルター・レヴィンの訪問を受けた。アメリカ合衆国がついに協商国側で参戦したことを受け、オスマン政府は16歳から50歳までの全在留アメリカ人に24時間以内の出頭命令を出し、従わなかった者はすべてスパイと見なすという発表をしたのだ<sup>(23)</sup>。アメリカ国籍をもつレヴィンは出頭せずに逃亡する道を選んだものの、避難を求めた先でいずれもそれを断られ、サカーキーニー家の戸口に立ったのである。サカーキーニーのそれまでの日記の中にレヴィンは登場しておらず、二人が知り合った経緯や関係の詳細は不明だが、サカーキーニーは自宅の扉を叩いた彼をその日の日記のなかで「友人のユダヤ教徒レヴィン氏<sup>(24)</sup>」と表現している[1917/1/27, 182]。レヴィンは国際的な保険エージェントに勤める一方で詩集も刊行しており、サカーキーニーはレヴィンを詩人と見なしていたようだ<sup>(25)</sup>。

レヴィンがサカーキーニーの家の扉を叩いたのは、あと一日、二日でイギリス軍がエルサレムを陥落させると予想されていたタイミングだった。しかし戦争は継続中であり、彼を匿うことがオスマン当局によってスパイとして認定される危険な行為であることは自明だった。しかしサカーキーニーは、とっさに拒絶して扉を閉めることはしなかった。

彼が後日まとめた文章によれば、彼の行動を決したのは、自分が「屋根を貸し、避難者を受け入れ、恐れる者を安心させ、叫ぶ者に答えようとする規範」を幼少期から与えられていたことを深く自覚していたためだった。「彼を中に

(23) al-Sakākīnī, Khalīl. Ḥulmī. 「私の夢」「私の刑務所生活」と題する執筆年月日不明の文章で、「私の刑務所生活」とともに日記第2巻巻末に収められている。この文章執筆に先立って、刑務所のなかでもダマスカス刑務所到着までの経緯を記録した日記を執筆しており、それらが元になってこの二つの文章は書かれている。

(24) 「ユダヤ教徒」は原文では「イスラミーリー」。サカーキーニーはこの時期、シオニズムの影響下にあるユダヤ人については「ヤフディー」、それ以外の文脈で、主にパレスチナに住むユダヤ教徒を指す場合にはイスラミーリー（聖書における「イスラエルの民」、イスラエル人）と呼んでいる。レヴィンについては後日の手記のなかでは「ヤフディー」としており、見方の変化がうかがわれる。

(25) のち、1933年10月にサカーキーニーはレヴィンの自殺の報を「フィラスティーン」紙で知り、息子サリーへの手紙でこう書いている。「かわいそうに。彼はヘブライ語の詩人だった。教養があり、ヘブライ語に加えフランス語、英語、ドイツ語に秀でていた」。al-Sakākīnī, Khalīl. *Yawmiyāt Khalīl al-Sakākīnī: Yawmiyāt. Rasā' il. Ta' ammulāt. Kitāb al-Khāmis, al-Juz' al-Thānī: bayna al-' Ab wa al-Ibun, Rasā' il Khalīl ' ilā Sarī fī Amrīkā, 1933-1934*. 2006. p.169.

入れれば、私は自国を裏切ることになる。もし彼を行かせれば、私は〈自分の言語〉を裏切ることになる。どちらの裏切りを犯すべきだろうか？これらの考えが閃光のように私の思考を駆けめぐる<sup>(26)</sup>」。ここで言われる〈自分の言語〉とは、「民族的規範、文化、文学」であるという<sup>(26)</sup>。

「結局私は、躊躇せず彼を中に入れた。スパイだと見なすなんてとんでもない。この男が逃げたのは、あらゆる通りを侵略者が爆撃し、夜も昼も移動が困難になっているさなかに家族を運命の手に委ねて出て行くことが、容易なことではないからだ。(中略)彼は自分でそう思っているようにハリール・サカーキーニーのもとに避難したのではなく、一人の庶民の裡にあるウンマ・アラビーヤ〔アラブ共同体〕に避難したのだ。(中略)それを求める者に避難場所を提供することがもし罪であるならば、ただ一人にではなく、共同体全体al-'ummah bi 'asarihāにその罪を着せるべきである。そうであるなら、我々の書物は焼かれなくてはならないし、我々の歴史は抹消され、我々の歴史のはじめから今日までの詩人や作家たちもすべて抹消されなくてはならない」。

この文章は当時の日記そのままではなく、釈放後、おそらくエルサレムに戻ったのちに一連の顛末を友人たちに説明し、援助への感謝を伝えるために当時の日記の内容を修正・加筆したものだ。したがって後からの思考の整理・洗練があるのは当然のことであり、むしろ自分の行為を振り返り、それに社会的な意味づけをしようとしたサカーキーニーの積極的な意図を汲むべきであろう。

シオニズムとの出会いのさいに確認したように、サカーキーニーはアラブ共同体の歴史と力に揺ぎない自信と誇りをもち、アラビア語教師としての使命を自覚していた。彼がレヴィンの訪問について、自身の思想を行動のなかで示すための挑戦として捉えるか、そのようなものとして後から整理していることは間違いない。

一方、これまでのサカーキーニーの日記からは、社交的で陽気な半面、共同体の排外性、頑迷さについて怒り続けてきた姿が読み取れる。彼はさらに、大戦に突入してからのパレスチナ社会に強い不満を持っていた。1915年のイナゴの襲来による飢饉、物価の上昇、そしてチフスなど疫病の流行によって人々は苦しめられていたが、彼が嫌悪したのは、むしろ自分の生活の苦しみに対してだけ不満の声を上げる人々の姿だった。「この閉塞した状況のなかで、仕事の減少、生活の困難について世間の人間が不満を持つのであれば、私の不満は、我々がヨーロッパと切り離され、この国 al-Bilād からヨーロッパ人がいなくなったことだ。人生への怒りが増すだけで毎日が過ぎてゆく。誰かと同席すれば、自分が彼と違っていることに気づくだけだ。何かを見ようとすれば、自己嫌悪するだけだ」[1915/2/7-3/7, 155]。彼にとって戦争によってもたらした最悪の出来事は、エルサレム社会の多様性の喪失だったのである。

レヴィンを匿うことに現れたのは、これまでに述べた理由だけではなく、生活の余裕を失ったことで視野を狭めるエルサレム社会への怒りや反発ではなかっただろうか。レヴィンが彼の属する共同体内部の人間ではなくユダヤ教徒であったことも無視できない要素である。彼はレヴィンを受け入れた自分の判断を個人のものとせず、アラブ社会の歴史と文化のなかに位置づけることで、この社会への自分の帰属を確認し、自分からどんどん離れてゆくエルサレム社会との距離を取り戻そうとしたように見える。

### 3. 歓待のジレンマと「義侠心」

#### 歓待の帰結

だが歓待は、客を受け入れた時点で終わるのではない。レヴィンを匿いはじめてから18日目、サカーキーニーは12月5日朝3時に警察の捜索を受けたのである。

「ぐっすりと眠っていると、ドアを激しく叩

(26) al-Sakākīnī, Khalīl. Hulmī.

く音が聞こえた。(中略) ドアを開けると警察署長のアレフ・ベイ、そしてここまで案内してきたユダヤ人の老女がいた。(中略) この老女は誰だ?」。ここで彼はレヴィンを匿ってから抱き始めた懷疑を告白する。

「レヴィンは私に避難を求めたとき、自分がここに来たことを誰も知らないと言った。我々是一緒に食事をとるよう彼に言ったが、彼はパンとオリーブとお茶にしか手を伸ばさなかった。あるときこちらが注意を向けていないとき、彼は窓から一人のユダヤ人を呼び止め、あの老女に食べ物を持って来させていた。(中略) なぜ我々の食べ物を食べなかったのだ? コシェルでないために不浄だというのなら、不浄な食べ物をとる我々も不浄ではないか。そうであるなら、なぜ我々のところに避難したのだ? <sup>(27)</sup>」。

危険を犯してレヴィンを受け入れたサカーキーニーにとって、ユダヤ教徒のコシェル(清浄食)の概念を受け入れる余裕はなかったであろう。隠れ場所の提供を受けながら、ホストではなく第三者に食べ物の供給を求め、客自らが危険をおびき寄せているのである。その結果サカーキーニーは巻き添えを食らい、過酷な経験をするようになった。客観的事実は知る由もないが、少なくともサカーキーニーは警察の搜索を受けたのにはそのような因果関係があったと確信した。自分がその中で生きてきた「民族的規範、文化、文学」という「ウンマ・アラビーヤ」全体の価値観を賭したつもりで行った行為が、自分の理解や価値観を超えた論理に基づく行動によって裏切られたのである。客観的に見て、これはあまりにも見合わない結果であろう。

エルサレムの刑務所のなかで、サカーキーニーは死の恐怖に怯える。戦時であり、自分たちが絞首刑に処せられることは現実的な恐怖だった <sup>(28)</sup>。妻のスルターナと姉ミルヤーの面会を受けた翌12月8日、彼は自分がダマスカスの刑務所に送られることを知り、むしろほっとする

のである。翌9日にはエルサレム市長のフサイン・アル＝フサイニーがイギリスに対する降伏文書に署名をするというタイミングであった。

少なくともサカーキーニーの記述のなかでは、彼の関心はレヴィンの「裏切り」には向かっていない。移送中のサカーキーニーが注意を向けたのは、囚人の身となった彼に対し、同胞がどのように接し、行動をしたのかという点である。

サカーキーニーとレヴィンは、二人のエルサレム出身者や3人のトルコ人ら8人と共に、二人ずつ両手を互いに繋がれた状態でエルサレムを徒歩で追い立てられる。途中、警備兵が一息つくために足を止めても、サカーキーニーたちはきつく縛られた縄のために座することもできない状態のままである。飲まず食わずの状態で30時間後にエリコに着くと、サカーキーニーはダマスカス到着までこの状態が続くことを恐れ、食べ物を頼める人物の姿を求め周囲を忙しく見回す。「通り過ぎる者たちは皆、見ざる聞かざるの態であった。我々と関係をもって罪になることがないように、彼らがそうする権利はある」。囚人の行列に対する町の人々の対応は、知人を含めて冷淡なもので、サカーキーニーがレヴィンを匿ったさいの状況とはあまりにも対照的である。だがサカーキーニー自身はこうした比較は一切しない。「やがて私は、私の生徒の一人である立派な若者、ミハーイール・アル＝クザーズを見つけた。彼は私の様子に仰天し、許可さえ求めずに、猛然と近づいてきたのだ。彼は今にも泣かんばかりの様子であった。彼が椅子を運んで来てくれたので我々は腰を下ろし、持ってきてくれたコーヒーを飲んだ」 <sup>(29)</sup>。

エリコからサルトを通過してアンマーンに着いたのは、エルサレムを出てから4日目のことだった。サカーキーニーはここでも、人々で賑わうアンマーンの町で物怖じすることなく、援助を求めて知り合いの顔を捜す。「彼らは私たちを

(27) al-Sakākīnī, Khalīl. Hulmī.

(28) 註 22 参照。

(29) al-Sakākīnī, Khalīl. Hulmī.



避けた。ただアンマーンで働いているバラムキ氏だけは、私のところに小さな男の子を寄越し、水など我々に必要なものを届けてくれた」<sup>(30)</sup>。ここに書かれた事実はそれとして興味深いが、こうしたことを詳細に書き残すことで、アラブ共同体の規範が現実にはどの程度のものであるのかを周囲の人々に伝え、啓蒙的に活用しようとするサカーキーニーの戦略もここからは読み取れる。

### 歓待と義侠心

ダマスカスの刑務所では、はじめ始める床と寒さの中、薄い掛け物一つで眠る毎晩だった。寒いのでレヴィンと同じマットで寝る状態だったが、レヴィンはひとたび眠ると「自分の権利以上の場所を占める」[1917/12/30, 210]。

刑務所に着いて10日目、サカーキーニーは初めて、レヴィンに対する率直な思いを日記に書いている。「刑務所で一緒なのは、災難における私の仲間、というより私の災いの元であるオルター・レヴィン氏だけだ。彼のことを知ろうと努力を重ね、接触の機会は多いにもかかわらず、彼のことが分からないし、彼も私のことが分からない。彼は古代のユダヤ人でも、新参のユダヤ人でもない。義侠心Murū'aがなかったら、私は彼と絶縁していただろう。しかし私は自分が彼を憎んだり、少しでも嫌悪をもったり、彼が私に害を与えたのだと感じたくない。反対に、私はエルサレムを出て以来ずっと、兄が弟に対するように親切にしてきた。彼の心を明るくし、我々に起きたことは不運のせいだと考えている」[1908/12/24, 205]。ここで「義侠心」としたmurū'aとは、辞書の上では「男らしさ／騎士道精神／人間性／勇敢さ」などの語義をもつ単語である。Akpınarによれば前イスラーム期に起源をもつ歓待は、そもそも名誉honorと騎士道chivalry<sup>(31)</sup>に深く関わりをもち、歓待は「相手の必要に無条件に従う行為」だと考え

られた。得体の知れない相手であっても、自分の論理で否定したり非難することなく受け入れるということになる。

「兄が弟に対するような」手助けは、サカーキーニー自身がフサイン・アル＝フサイニーから受けたものでもあり、この徳目の価値自体は疑うべくもない。だがこの「義侠心」こそがサカーキーニーを苦しめる。彼はレヴィンとの「同じマット」についての記述に続き、レヴィンが「ユダヤ人のレストランの食べ物」しか食べないと書く。私費で特別に注文していたのだろう。その到着はたいがい遅れるためレヴィンは苛立ち文句を言うが、満腹になれば「けろっとしている」。しかしサカーキーニーがレヴィンを真に批判をする点は、彼の排他的な態度だった。「彼はユダヤ人の美德やその偉大さを歌い上げ、自分たちのウンマ以外のあらゆるウンマへの憎悪を露骨に示すのだ」。無条件に相手を受け入れようとするのは自分ばかりで、相手の態度や思想は、自分と異なる他者を受け入れぬ、排他的なものに見える。この点こそは、サカーキーニーが正面からさらに問題にすべきことではなかっただろうか。

### 「義侠心」の陥穽

ところがサカーキーニーは、レヴィンの排他的な態度について述べたあと、「多くの点で私が彼を批判するように、彼も私について批判があるだろう」と筆致を和らげる。そしてムタナッビーの詩から次の句を引用して筆を止める。「生まれもったものに誰が満足しよう／数えられる欠点ならばよほどの貴人」[1908/12/30, 210-1]。レヴィンについて考えることを放棄した、投げやりな姿勢にも見える。レヴィンを憎んだり彼に嫌悪を持ちたくないという過剰な義侠心によって、相手の排他的な態度を客観的に批判することさえ自身に許そうとしない。

本稿前半で取り上げたムフリフ（＝ナジー

(30) ibid.

(31) ここで chivalry と訳されているアラビア語は murū'a、または futūwa であろう。後者の語義は「若者らしさ」だが、ともに理想像としての「男らしさ」を意味する。Akpınar, Snjezana. *Hospitality in Islam. Religion East and West*, 7. 2007. pp. 23-7.

ブ・ナッサール)も、歓待の受け手としての立場から、この「義侠心Murū'a」に触れている。まだ逃避行の初期に半潜伏状態でいたところ、ファイサルによる革命宣言のために対アラブ強硬政策を打ち出された影響を受け、ペイルスト州一帯で指名手配され本格的な逃避行に入ったさいのエピソードである [MG, 101]。

20人の警察官によるナザレの捜査を辛くも逃れ身一つで移動を始めたムフリフは、たちまち身の置き場に困窮し、ナザレの名家のメンバーで近郊の村ダブーリヤに住むタウフィーク・ベイ<sup>(32)</sup>を訪ねる。しかし食事を提供されたのに当の主人は出掛けてしまうというやり方で宿泊を婉曲に拒否され、途方に暮れる。ごく親しい友人の保護を離れたムフリフは、客人をもてなす余裕のある有力者の好意をあてにできないのである。この夜ナザレに戻り、貧しい人物の家の軒先を借りたムフリフは、「神によってアラブの誇りが試されている」と考えながら一心に歩き、アンドゥール村にたどり着く [MG, 107]。

窮したムフリフは、タウフィーク・ベイと同じアル＝ファーフームの一族であるアブドゥッラー・ベイ<sup>(33)</sup>のもとに行くが、アブドゥッラーはムフリフがかつて激しく批判する記事を書いていた相手である<sup>(34)</sup>。そのアブドゥッラーが自分を快く受け入れるとはとうてい期待できないものの、他に行くあてのないムフリフは、アブドゥッラーの「賢さや義侠心murū'a」を信じることにする。

他の客の前ではムフリフをそつなく受け入れたアブドゥッラーは、二人だけになると客間の扉を閉め、今後の方針を彼に問い詰める。自分がムフリフから受けた批判の文言を暗に皮肉りながら「ジャマール・パシヤから見ればお前は

英国人のスパイであり、統一派の敵だ」と断言し、返事の猶予を求めるムフリフに「2日なり3日なり。私に恥辱を与えたお前が、ここにいるとは誰も思わないから」と返し、身の縮むような思いをさせる [MG, 108]。

ところがいざ自宅にムフリフの捜査の手が及ぶと、アブドゥッラーはムフリフへの恨みつらみを語る演技をし、警官を巧みにはぐらかしてしまった。さらに別れ際にはムフリフの固辞にもかかわらず、その手に2枚の金貨を受け取らせる。声も出せずに別れた後、ムフリフは次のような思いに深く捉われる。「私が激しい批判をしたあのアブドゥッラーが、私が苦境にいるときに義侠心murū'aや気遣いを示してくれたとは…、アラブ人が互いに胸襟を広げ誠意をもち、兄弟となって協力するためには、このような行為にこそ真に学ぶべきものがあるのではないのか？」 [MG, 116]。

義侠心の実践により追っ手から逃れることのできたムフリフに、これ以上の考察を行う余地はない。しかしここで読者の前に見えるのは、苦境にあって支援を受けることの危うさである。この局面でいかにアブドゥッラーから篤い歓待を受けたにせよ、かつてムフリフが彼に対し激しい批判を行なうに至った事情自体が変わるわけではない。だが、それが意図されたものか否かにかかわらず、歓待は一人の人間に対する見方を変えさせ、批判意識を奪ってしまったのである。

サカーキーニーは自身の義侠心を守るために、どのように試みても他者を寄せつけず排他的に見えるレヴィンの態度を問題にすることを放棄してしまった。他方ナッサールは、彼を寛大に匿ってくれたかつての論敵の示した義侠心に深く心を動かされ、それまで抱いてきた批判

(32) [1874-1935] ナザレでカーディー(イスラームの裁判官) および市長を二期務め、オスマン国会のナザレ選出議員にもなった人物という。パレスチナの血縁集団に関する情報サイト <http://www.howiyya.com/> で検索。[アクセス日= 2019.10.15]

(33) [1870-1925] 1904年にナザレ市長となった人物。[同上]

(34) 詳しい内容については触れていないが、ムフリフがアブドゥッラーを書いた言葉として「容疑者(アブドゥッラー)を逮捕できないとは、いったいアンドゥールはラジャーフになったとでもいうのか？」が引用されている。アブドゥッラーの住む村が、1838年にドゥルーズ派による反政府蜂起が起きた村であるラジャーフであるかのように、手出し出来ないでいる政府を批判している。ナッサールが実際にジャーナリストとして書いた記事だと思われる。

意識を溶解させる。〈歓待〉において〈敵〉の存在が見えなくなり、そのことに無自覚である点は、歓待を与える者と与えられた者という対照的な立場にありながらも共通しているように思われる。

## おわりに

ムフリフ（＝ナッサール）はダマスカスの刑務所で約二ヶ月過ごし、裁判で無罪となって釈放されたが、その彼を待っていたのは、またもや歓待の陥穽だった。釈放のさい身元引受人となった、旧知のジャーナリストであるクルド・アリーはオスマン当局の刊行する新聞の編集を行っており、そこにムフリフをも引き込もうとする。当局の意向でもあるその誘いをのりくらしとかわしながら、彼はかろうじて訴追を免れ1917年の11月頃に故郷ハイファへと戻った。

サカーキーニーがダマスカス刑務所に送られるのはその翌月というタイミングである。彼の刑務所生活はおよそ一ヶ月であり、1918年1月10日に保釈された。彼は自分の釈放後も刑務所に残されたレヴィンのために律儀に面会を重ね、細かな用向きを引き受けるが、釈放されたレヴィンはしばらくすると、サカーキーニーに何も告げずに去ってしまった[1918/4/26, 307]。サカーキーニーにとってレヴィンとの関係は、最後まで理不尽かつ不可解なものとして終わったのである<sup>(35)</sup>。だが日記の文面を見る限り、サカーキーニーはそれに対し一切のこだわりを示していない。

パレスチナ社会にシオニズム運動の波に乗ってやって来たユダヤ教徒の排他的なスタンスを問うことを自身に禁じたサカーキーニーの姿勢や、ジャーナリストとしてのかつての自分の主張を裏切るナッサールの危うさ。彼らがアラブ

社会に根をもつ歓待の論理に深く依拠していたことが、結果的に、それにふさわしからぬ局面で〈敵〉との関係を溶解させたことになる。

冒頭で挙げた「ハーティム」を有名にしているのは、贅を尽くしたもてなしぶりゆえではなく、敵の領域に属する場所からやって来た者も分け隔てなく歓待したためだといわれる<sup>(36)</sup>。この分け隔てない歓待は、植民地主義の時代のなかでは侵略者を利し、パレスチナにあってはシオニズム運動に利用されたことになるだろう。

イスラーム文化において、歓待は一般に与える者の寛大さによって表現されるが、注目すべきは現在自分のもつ財産のなかに「乞う者や、乞うこともできない困窮者たちの権利 *ḥaqqun li al-sā'ili wa al-mahrūmi* <sup>(37)</sup>」がすでに含まれているとする文言が、預言者イブラーヒーム（アブラハム）が行なった歓待への言及と同じ文脈のなかでクルアーンに登場していることである。与える者の度量とは関わりなく、本来、すでにある者の財産にはそれを持たない者の分け前が権利として含まれているとするこの言葉は、国民国家の枠組みの中で無条件の歓待と条件付きの歓待を区別したカントに対する批判的な読みの可能性を、シェールやデリダとは別の視座から考えさせてくれる。

シェールによれば、伝説か否かによらず、ベドウィンの歓待が数々の物語によって称えられていた時代にあって、カントはそうした「本性＝自然にもとづく」善良さを彼ら「未開人」に付与して道徳的に判断する姿勢を退けた<sup>(38)</sup>。少なくとも遊牧社会の伝統を取り込んだイスラーム社会の思考様式の中で、歓待は自然の善良さではなく、法的な枠組みのなかに位置づけることができる。ベドウィンをその「本性」によって理解することの拒絶と、歓待を訪問権に限

(35) アーディル・マナーウは「サカーキーニー日記」第2巻の序文で、第一次大戦期のサカーキーニーとシオニズムの関係およびレヴィンとの関係における〈謎〉について述べ、レヴィンが有力なスパイであったというオスマン当局者の証言に言及している。  
Manā', 'Ādil. Miḥna al-Sakākīnī wa yawmiyātihi. *Yawmiyāt Khalīl al-Sakākīnī. Kitāb al-Thānī*. 2004. pp.11-28.

(36) Akpinar, 2007.

(37) 「クルアーン」第51章（＝「撒き散らすもの」章）、19節。日本語訳は『聖クルアーン』日本ムスリム教会。

(38) ルネ・シェール『歓待のユートピア 歓待神礼賛』、73-75頁。

定したこととのあいだに、無条件の歓待を法的に位置づけるイスラーム的観点を挿入することは可能だろうか。こうした問いをさらに重ねつつ、パレスチナ国民国家建設の方向性が模索されながら破綻に向かうこの時代における歓待の問題項をめぐって、考察を続けてゆきたい。